



エコノフォーラム座談会 「海外インターンシップは面白い」

著者	藤田 友尚, 阿部 優志, 岩崎 桃子, 屋 真由子, 妻鳥 幹大
雑誌名	エコノフォーラム21 : 学生と教職員のインターコミュニケーション誌
号	25
ページ	24-31
発行年	2019-03-14
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027831

エコノフォーラム座談会

海外インターンシップは面白い

日時…2018年11月7日(水)

17時~18時

場所…経済学部棟2階会議室

出席者(五十音順)...

学生

阿部 優志さん

岩崎 桃子さん

屋 真由子さん

妻鳥 幹大さん

司会 藤田 友尚教授



インターンシップとは、就職する前に企業などで就業体験をすることです。日本では、1日から5日程度、現場で働いている社員の人たちに混ざって仕事を体験します。大学生の関心は高く、学生の70%以上が参加していると言われています。

インターンシップは国内だけではなく、海外でも就業体験をする海外インターンシップが展開されています。海外ということで敷居が高いと思われるがちですが、ヨーロッパ諸国ではごく普通に行われています。学生は積極的に海外に出て経験の幅を広げます。

この座談会では海外インターンシップを経験した経済学部の4名の学生さんに集ってもらい、彼らの体験談をうかがいました。

藤田 海外でのインターンシップを経験していること、それがみなさんの共通点です。現在、インターンシップってすごい人気なんですね。政府も国内でのインターンシップを応援していますし、大学生の関心も高い。ただし、海外でのインターンシップはそれほど一般的ではありません。ですから今日は、みなさんに海外でのインターンシップに参加されたときの経験や、それを通じて考えたことなどを聞かせてほしいと思っています。

まず阿部君からいきましょうか。どうしてインターンシップに参加したか動機から教えてく

ださい。

阿部 ゼミに入った時点からインターンシップでインドネシアに行くということは決まっていました。

藤田 なるほど。ということは、岩崎さんも同じですか。

岩崎 そうですね。

藤田 妻鳥君はどうですか。ベトナムですが。

妻鳥 僕は、将来、自分が働く姿を想像したときに、海外で働くかどうか大きな基準になると思うんです。海外で働くことが自分にとって楽しいと思えるかどうか、自分の体でそれを確

かめたくて行こうと思いました。

藤田 ベトナムというのはどうして。

妻鳥 ベトナムはアジアの市場でも盛り上がりを見せている国ですね。僕は別に語学学習を目的として行ったわけじゃなくて、海外で働くということだったので、それで関心があったのです。

屋 私は何か直感で、インターンシップのチラシを見たときに、これに行くべきかなというふうに思ったので参加しました。見たのはアメリカのロサンゼルスでのインターンシップのチラシでした。私はもともとすごく慎重な性格で、

何事もかなり熟考してやるんですけど、今回は直感に従ってみようと思って参加しました。私が行ったとき、同じ年の子が数人しかいなくて、ほとんどが1学年上とかの人だったので、やっぱり就職活動を意識しての参加かなと思いました。私は就職活動というよりはどちらかというと海外で働くということに興味があったので、それに自分は向いているのかどうかを検証するために参加しました。

藤田 バリに行ったお二人は、バリに行くのは自動的に決まっていたんですね。

岩崎 そうです。観光調査も兼ねたゼミの活動の一環でした。インターンをしなげら、その就業後に調査をさせてもらったりしました。

藤田 フィールドワークもついてくるということですね。

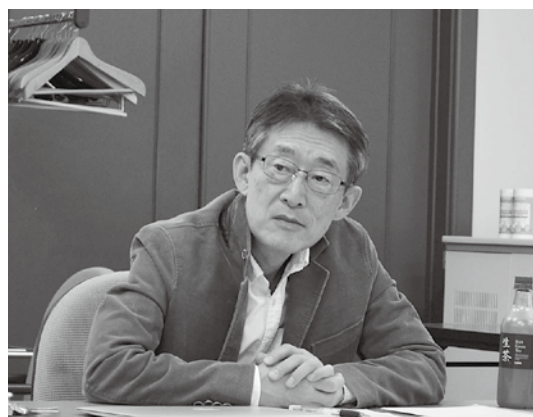
阿部 ええ。しかも、自分たちでつくった質問項目があつて、その調査の結果をもとに論文を書いていきます。

岩崎 日本人のバリにおける観光調査をやりました。土日はやっぱり日本人も来ますから。

阿部 問題意識というのは、中国人が増えてきていて、今までは日本語だったのが中国語に変わってきています。そういったところに問題意識を持って調査したという感じです。

藤田 屋さんのほうは、インターンシップに行ってからあとはどういう感じでした。何か勉強につながる事ができたとか、そんなことはありませんか。

屋 1カ月間ホテルで生活していたんですけど、そのホテルで働いているおばちゃんたちが



藤田 友尚 経済学部教授

スペイン語を話していたのがすごく印象的でした。移民が多くて、スペイン語を話す人が4割ぐらいいると聞きました。私はそのとき1年生だったんですが、外国語としてスペイン語を選択していて、ちょっと聞き取れたときはすごくうれしくて、2年生になったとき語彙力は上がったかなとは思いました。その点で言ったら勉強にはつながったかなと。

妻鳥 勉強という面ですが、大学の学課的な勉強じゃなくて実生活でのコミュニケーションという点ではすごく勉強になったことがありました。仕事が終わって、日本人がやっているお店があつて、そこで日本人の駐在員の方としゃべりました。そんなときに、仕事はどんなことをされているんですかと聞いたり、いろんな人と出会って、こういう仕事はこういう状況とか、

こういう仕事をベトナムでやるならこうとか、そういう話を聞いたりしました。社会人としてどんなスキルが必要か、などのことも教わりました。コミュニケーション力、あるいは対人スキルというのでしょうか、そういうものはすぐ身についたと思います。

さまざまな仕事に従事

藤田 岩崎さんは日系の観光出版社でのインターンシップですね。具体的にどんな仕事をしてたんですか。

岩崎 観光出版社というか、観光系のフリーマガジンを制作している会社で、バリに在住している日本人が編集者としてバリの魅力を伝えるフリーマガジンなんです。日本人の視点でバリを紹介するんですけど、住んでるからディープな場所とか、一般的じゃないようなことも紹介できます。基本的にはオフィスワークだったんですけど、取材にも行ったりしました。滞在の最後のほうに、ちょっといろいろなアクティビティを体験して、あとは同じ会社と同じゼミから4人行っていて、4人で特集記事を組むんだと言われたので、学生旅行でいいところみたいなのを紹介する記事を考えたりしました。

屋 私は教育系の事業を扱うところと、あとはロサンゼルスに住んでる日本人向けに雑誌を発行してる部署がある会社に行きました。マーケティング型ビジネス体感プログラムというプログラムがあつて、その一環としてインターンシップに参加しました。ロサンゼルスの日系企



阿部 優志（あべ ゆうし）経済学部3年。栗田ゼミでゼミ長を務める。2018年夏、インドネシアのバリ島の日系企業で約1ヶ月半のインターンシップに参加。

業が抱える課題を消費者へのアンケートや競合調査など実践的なマーケティング調査から解決し、現役のビジネスパーソンに対し事業提案を行うということをやりました。ふだん昼間は普通に仕事をし、その後にマーケティングを行って、自分たちで新規事業を計画して、その会社の方に提案するという流れでした。

妻鳥 僕の業務内容は、IT企業で、ベトナム人ばかりなので、そういう人たちに日本語教育をするのがメインでした。日本語をできるだけしゃべれるようにするのが、自由に教育していいよという感じで任せられました。あとは若者視点からマーケティングとか、新規事業の新しい案を出すというのが仕事でした。

藤田 新しい案って、例えばどんなものでした。

妻鳥 IT系なのでアプリ開発とかがあつて、カップラーメンの麺の「硬さ」を調整できるみたいな……。僕はラーメンを「硬麺」で食べたタイプなんです。それで、いろんな人が何分をやったら硬かったとか、そういう情報をまとめて、このカップラーメンなら何分で「硬麺」になるみたいな、そういうのができていいんじゃないかなと……。

藤田 それでどうでした。受けた。

妻鳥 受け悪かったです（笑）。実現したかもわからないです。

海外での仕事体験を通して考えたこと

藤田 阿部君、何かそういう自分のやってるところでなにか案が出せたことはあるんですか。

阿部 僕はサーフィンの会社で働いていて、ずっと店にいました。接客でしたが、最初は接客業務のマニュアルを渡されて、これだけやってみて、といった感じでした。あとは、もし何かやりたかったら自分たちで考えて進めていつて、という具合で。自分たちはやる気なんです。周りのインストラクターからしたら、急に何しに来たんだこいつ、って感じで、彼らの理解を得ながら鼓舞していくのが難しかったです。

最終的にできたこととしては、お客さんがサーフィンが終わった後に座れるリラックスできる場所がないことがわかって、お客さんをもっと安らげる空間をつくらうという話になりました。最終的に壁のペイントを絵師の人を呼

んで描いてもらったり、サーフボードで椅子をつくったりして、お客さんが少しでもリラックスできる空間をつくることに専念していました。

藤田 おもしろそうですね、アイデアとしては。例えば、仕事を通じて何か学んだことはあるかしら。

阿部 仕事をする上で、それまでの自分の考えだと、話すこと、伝えることがすごく大事なかなと思っていました。けれど、それよりも、むしろ聞くことのほうが大事だということを仕事をしていてすごく思いました。相手が何を考えているか、何をして欲しいか、何がしたいか、そういう相手の状況を聞き出すということが誰かと共に仕事をする上で大事なようになってしまいました。

屋 私は、日本にいるとき、仕事に対してしんどいとかつらい、おもしろくないといったイメージがすごくあったんです。しかし、社員の方とかを見ていたら、仕事は一生懸命して遊ぶときは遊ぶ、そんなメリハリがすごく、ランチャイムのとときとかはすごく楽しそうにしていたりとか、きょうは何々を食べに行こうみたいなことがあつて、楽しむこともしていいたんだみたいな感じで。真面目に取り組むのも大事だけど、コミュニケーションもすごく大事なんだなと思うようになりました。

岩崎 日本にいたとき、特に東南アジアとかでは労働の質が低い、仕事の時間も守らない、約束も守らない、頼んでも期待したものが返ってこない、だから余り期待したらダメ、みたいな



岩崎 桃子（いわさき とうこ）経済学部3年。栗田ゼミ所属。2018年夏、インドネシアのバリ島の日系観光出版社で約1ヶ月半のインターンシップに参加。

ふうに言われていました。日本人のレベルに引き上げないと、現地の人をそこまでもっていかなきゃ、と思ってたんですけど、インターンに行かせてもらった先の社長さんから、世界から見たら日本人が特殊でちゃんとし過ぎていて、だからそのレベルにもっていかうとしても無理と言われました。それで自分たちのほうがマイナーなんだから、そこをちゃんと理解しないとうまくやっていけないよ、と。確かにそうだな、と思ったことがあります。

屋 実際できないんですか、本当に。

岩崎 多分できるんですけど、現地の人があるまで求めているというか……。

屋 このぐらいでいいよという基準が現地的にあるということ……。

岩崎 会社も、現地の人たちの考え方や習慣が

あるので、日本的発想だけでやっていたら、やっぱりうまくいかない。

妻鳥 普通、日本には遅刻する場合には、絶対遅延証明とかいるじゃないですか。でもベトナムの社員って、会社に電話入れるわけでもないんです。その班のチームのグループLINEで、「妻鳥、遅れるから」みたいな。寝坊したから遅れる、きのう飲んでたから遅れる、エーッ！、という感じです。しかし、社員のひととはみんなベトナム人なんですけど、フレンドリーで、飲みに行こうとか遊びに行こうとか。3週目ぐらいに旅行に行こうって誘われて、行きたかったんですけど、自分に予定が入って行けなかったんです。

阿部 会社ではインドネシア人が周りにいて、常にインドネシア人に囲まれながら過ごしてました。でも僕の会社は結構きつちりしたところで、遅刻する人は全然いなかったです。経営者が日本人で、結構厳しいから。というところもあるんですけど、ほぼ遅刻はゼロ。一回僕が遅刻してしまったら、ものすごく険悪な雰囲気になって……。社長さんは、インドネシアで起業してやっていこうと思ったら、一人ぐらい怖い役割を担う人がいないとだめで、その役を自分がやっているとおっしゃってました。

妻鳥 社員は何人規模なんですか。

阿部 社員はサーフィンのほうは大体10人程度ぐらいで、もう一つ働かせてもらっていたバスの会社は中心となるオフィスは20人ぐらいでしたが、全体としては130人ぐらいのスタッフがいいます。

妻鳥 僕のところは大きな企業で200人ぐらいいて、びっくりしました。

岩崎 そこはベトナム人だけなんですか。

妻鳥 日系の企業で、日本人の方は3人ぐらいいました。現地の人を雇ってるわけです。

岩崎 私のところは日本人とバリ人が半々ぐらいだったんです。規模もそれほど大きくないの、日本語が飛び交ってました。現地の人で雇われてるのはデザイナーとか、写真とかエディットしたりする人、あとは営業の人。バリ人に売り込みに行くので日本人だとしてもわからないところがあるので。企画とかは在居の日本人なので、私たちが話しているのは基本的には日本人の社員さん。バリ人のエディターの人は隣の席だったので、ちょっと疲れたときにバリのお菓子食べる、みたいなことはありました。

言葉や文化の差は

藤田 英語の語学力はどう思いますか。

岩崎 インターンで英語力が上がったとは思いません。そんなに変わらない感じですよ。生活面ではホテルの人としゃべったりするのは英語なんですけど、会社は日本語でやっていて、バリの人としゃべるときにちょっと英語を使うくらいでした。でも、ちょっとだけバリの言葉を教えてもらったりとかはしてました。

屋 私の方は、1カ月もいたら、スペイン語を話すその人とも仲よくなったりしたんですが、英語を織りまぜてやっていたので、詳しい話と

かはできなかったです。英語を使うのは、私も日常生活ぐらいです。あとは、マーケティングの一環として、大学に行って現地の大学生に聞く機会がすごくたくさんあって、そのときは英語だったので必死に聞いたり言ったりとかはしていました。聞くことに関しては、答えがあら

じめ用意されてるわけじゃないので、必死に聞かないといけないんですけど、語学力はそんなに変わらないかなという感じですね。

妻鳥 僕は語学力があがったと思います。自分が何かしやべろうと思えばいくらでもその機会をつくれたので、自分から英語で話しかけたら、みんな英語で答えが返ってくる。最初に着いたとき、英語は得意ではなかったんですが、普通に結構しゃべれるようになって帰ってきました。ベトナムに行ったのは英語目的じゃなかったんですけど。

阿部 社員さんとは基本英語で話していて、ブレゼンの機会とかいただいたときはちょっと難しい英語が必要になってきて、この辺ちゃんとやっておけばよかったと思うことがあります。ただ、日常生活はけっこういけるかなという感じです。サーフィンのほうは日本人が多いので日本語でいけるんですけど、たまに外国人のツアー客が来たりして、母語が英語の人と英語でしゃべるときはやっぱりちょっと緊張しました。インドネシア人との英語はあまり緊張しなかったですが。

藤田 文化の差という面で何かがついたことがありますか。特にインドネシアのバリなんか、少し違うと思います。

阿部 ビーチには売り子がたくさんいるんですけど、2週間ぐらいいたときには、顔見知りになったこともあって、これまで周りにいた売り子の人が声をかけてこなくなってたんです。彼らは自分たちでつくったミサンガだったり、安い偽物のレイバンのサンダースだったり、ござとかを観光客に声をかけて売るのが仕事です。ある日すごく暇で、ビーチで座って過ごした日があったんです。海を眺めて、そろそろ波いいかな、みたいな感じで。そんな時、売り子がいつも毎日同じ人で、同じものを売っている事に、急に、でも強烈に感じました。目の前の海で自分はサーフィンしてるのに、ビーチには貧困があって、そういうのがバリにはあって、1ヶ月滞在したからこそ気づいた点かなと思います。

藤田 バリは観光の町で、リゾート地として有名ですが、貧富の格差はひどいところなんだと聞いたことがあります。それで事件とかも時々あったりして、貧困が原因だったりしますけどね。

屋 私は、みんな異質なものの、自分と違うものを受け入れて生きてるって感じがありました。すごく繁華なところからちょっと入っただけで、チャイナタウンだったりリトル・トーキョーだったり、あるいはスラム街だったりとかが近くにあって、貧富の差とか文化の違いというのすごく身近に感じられたと思います。

妻鳥 みんなけっこう「テキスト」なんですけど、でも人情はすごくあって、本当にすぐ輪の中に入れてくれるというのが特徴としてあ

ります。今でも「2月妻鳥のグループがあって、この前、大阪で地震が起きたときに「地震起きましたね、大丈夫ですか」みたいなメールを送ってきてくれました。国民性としては「テキスト」な部分もあるんですけど、そのかわりすごく人に対して温かいというか、興味津々で来てくれるので、そこはすごくありがたいなと思いました。

岩崎 バリの人はめちゃくちゃ日本人好きで、すごい親日家なんです。優しいなという雰囲気を出してやっているのかもしれないなと思います。

阿部 一度、歩いて20分ぐらいのところまでお客さんを迎えに行く日があったんです。早朝6時にそのホテルに行くと言われて。でもその前日に足を怪我して、足を引をきずりながら歩



屋 真由子（おく まゆこ）経済学部3年。2017年冬、アメリカのロサンゼルスで1ヶ月間のインターンシップに参加。平日はしっかり働き土日は遊ぶというメリハリのある生活で、多くを学び、考え方に大きな変化があった。

いていたんです。そしたらバイクのおっちゃん
が、早朝ですよ、いきなり「どこまで行くの」つ
て尋ねてきたんです。バリのバイクはフリーで
タクシーもやっていて、歩いていたらバイクに
どうと声をかけられます。バイクに乗りたけれ
ば、その人に目的地を言えばいいんですけど、
かなり高くて普通なら1,0000円、2,000
0円ぐらいって言われます。だから「要りませ
ん」と言ったのですが、「1ドルでもいいから、
どこ行くの」って言われて。それでも時間に
余裕があったので「歩くからいいよ」って言っ
たんですが、「乗っていけ」って言われました。
しかも、タダで。そういう人情的な面での優し
さがあるって、バリの親日性を感じますね。

海外インターンシップで自分の《殻》を 打ち破る

藤田 海外のインターンシップの場合、何かメ
リットとかデメリットみたなのがありますか。
メリットのほうが多いですか。

妻鳥 メリットしかなかったなと思います。
だって、行ったら絶対学ぶことがあるし……。
屋 デメリットがあるとしたら、この企業に
行きたいという希望は出せないんです。例えば
ミスマッチが起きたとしたらデメリットかなと
思います。例えばホームステイ先によっては、
食に関していうとすごい差があります。豆ばっ
かり出てきたとか、毎日カレーばっかりだった
とか。家族の交流を大事にしている、夜御飯ま
でに帰らなきゃみたいなのがあったりとか、そ
ういうことがあったらデメリットかなとは思



妻鳥 幹大 (めんどり みきひろ) 経済学部3年。2018
年春、ベトナムで1ヶ月間のインターンシップに参加。
関西学院中学部野球部の公認学生コーチをしている。

ます。

岩崎 私は、インターンって何をするかがちや
んと決められてるものだと思ってたんです。日
本のインターンでも、マーケティングだったら
マーケティングというのを自分たちで考えて
やっていく、という具合に。でも、私のところ
は、インターン用にわざわざ仕事などは用意さ
れていなくて、ふだんの通常業務の中でどう自
分たちが入っていくかだったので、本当に実際
に働いてるみたいでした。

藤田 海外のインターンシップに参加するとい
うと、どんな人が向いてると思いますか。例え
ば今後、みなさんの後輩なんかに、インター
ンシップに行きたいんですけど、と相談され
たとしたら、どんなアドバイスとかしてあげられ
るでしょうね。

妻鳥 もう、迷ってる時点で行ってもいいと思
います。だって、迷ってるという時点で行き
たいという気持ちはどこかにあるはずなんで、そ
う思ってる時点で行かないとわからないし、も
う迷った時点で行けよ、と思います。

屋 私は1年生の終わりに行っただけで、
1年生の期間をすごく無駄にしたなと思いま
した。1年生のときに、自分が目標を持って何
かをするとか、そういうことをあまりしてこ
なかったなと気付いて、それってすごくもった
いないなと思いました。残り3年あるんだつたら、
何か自分が変わるようなことをしたいと思っ
たので、ふだんだったら海外で生活するなんて自
分にはできないし、とかって思ってた行かなか
ったかもしれないけれど、そこで勇気を出して
やってみようと思ったことがよかった。その後、
何事もやってみたほうがいいということを学ん
で、いろいろなことに挑戦したので、それらの
経験を通して大学生活が充実したと思います。
もし自分に向いてないかと思ったとしても、向
くように工夫していけると思うので、行っただ
うがいいかなと思いますよ。

岩崎 向いてるというか、早目にやってほしい。
もし昔の自分に向かって言えるなら……。

1年生とかに行っただけで、これからその後
の大学生活にもっとつながれたかなと。私の
場合、3年生で行ったので、もう残りは就職活
動やゼミの論文とかで、あと1年ちょっとしか
なくて、もっと前に行っていたら少し違ったか
な。

阿部 僕は3年生で行くことに賛成かな。ゼミ

で1年かけて30冊ちよつとぐらいの本を先生から指定され、それを読みました。例えば、文化に対する受け取り方を勉強する本だったり、働き方に関する本だったり。そういうのを読んで行ったということがあったので、僕は逆に3年生でよかったなと。

藤田 なるほど。つまり阿部君が言ったみたいに、いろいろの働き方だとかインドネシアの風土や国民性についての知識を得ておいて、それを实地に検証してみるという考えも有りだし、他の3人のように、自分で動いてみて自分がどのように変わっていくのか、自己変革という思いで参加するのも有りということですね。それは個人それぞれの持ち味ですね。参考になるかもしれません。

大学生だからできる海外での仕事体験

藤田 海外インターンシップは高校生にとつて、きつと新しいことだと思っんですよ。ぱつと大学に入ってきて、留学以外にこういう制度があると思う。高校生のときに、みなさんはインターンシップなんて考えたことがありましたか。

妻鳥 ないです。留学はあったけど、インターンシップまでは……。

屋 インターンシップはない……。留学は知ってるけど、インターンシップというものがあることは知らなかったです。

岩崎 私は、オーストラリアでワンセメスターの期間、留学したんですが、留学期間はもちろん

ん大学で勉強する。友達と交流して文化を知ったりとかしたんですけど、インターンシップは語学学習じゃないし、語学力を高めたという目的で行くものでもないもので、より現地感、よりその生活の中に入り込むみたいなところがあります。留学のときはよそ様という感じの雰囲気、もちろんあなた留学生だからという建前があったんですけど、インターンシップに行ったら、そんなこと言ってる人は要らない。邪魔なだけですから。

藤田 みんな3年生で、これから就活が本格的に始まりますね。この経験を何かこれから活かすことができそうですか。

阿部 僕はサーフィンの会社で何かしたいなら自分たちで考えて、と言われたときに、会社の中で新しい企画を始めようとなりました。その際、どうやってほかの人をキャッチアップしていくか、引き連れていくかというところで悩みました。

一方でバスの会社では、何人か企画者がいて、企画がもう考えられている途中から入って、何かそれに対して意見を出してと言われました。内容を見て、こことか甘いんじゃないですかとか、そんなことしか言えなくて、企画者の方たちほどアツくなれなかった自分もいます。

つまり二つの立場を経験しました。一つは自分が企画者になる側、もう一つは自分が引張られる側になるという立場です。どちらの立場も全然違って、かなり悩みました。どちらか一方の立場に立った時に、もう一方の立場も考え

ないとだめだなということは、今後、社会人としての活動に活かせるのではないかと思います。

妻鳥 僕のいたところは、企業の規模が大きいので、まずインターンに来てるということを知ってる人が少ないんです。ですから、まず、日本語教育をする人たちに自分たちのことを知らせるということから始めました。朝早く出社して、玄関にいて、みんなに挨拶して自己PRをするということをしました。それでみんなに知ってもらって、こういうことをやってるといふのを話して、それで参加してもらったんです。とりあえず自分から積極的にいろいろしていかないと何も起これない、まず行動を起こさなければ何も起これないと思いました。

屋 私の場合、1年生の終わりに行ったので、インターンシップの経験を就活で活かそうと思ってはいなかったです。それで、今後の自分の考え方だったりとか生き方という点で何か得るところはあったということです。

岩崎 人気の企業とか有名なところとかに行きたいって思う人は多いですよ。私も1年生からずっとそう思っっていて、でも、今回のバリのインターンシップではバリの中小企業で働いたので、そのよさみたいなことがわかりました。いわゆる一般大学生の就活の王道、つまり、いっぱいセミナーに行っって、いろんな企業を知って業界分析をして、みたいなものじゃなくて、日本の中小企業にちよつと目を向けてみたいとか、ベンチャーとか楽しそうだなとか、そんな方向に今は意識が向かうようになりました。

藤田 みなさんの話を聞いていると、インターンシップが一人ひとりの生き方や考え方にとっても豊かな経験をもたらしたことがわかります。インターンシップでの経験はみなさんの自信につながっているのは確実で、その経験は就活でも力となりそうですね。これから就活が本格化しますが、みなさんの健闘と幸運をお祈りしています。

今日は、長時間ありがとうございました。

